

なにものでもない

経営情報学部4年 野中 柊希

私の学生生活を振り返ってみると実に充実した4年間であったと思う。私たちは2020年、ちょうどコロナが流行った年に入学した。学生生活以外でもその多くで不便を強いられたことを今でも昨日のことのように思い出す。私はいつでも、その時、その時間を大切に生きてきたつもりだ。その時その時じっくり考えて生きてきたと自分では思っている。この4年間に世界ではいろんなことが起こった。終わらなような紛争も、社会を変えてしまうほどの病気も、それをも乗り越えようとする発明もあった。いざ過去を振り返ってみると、ここ数年は本当に大変だった。しかし、今だけが大変だったなんてことはないだろう。どんな時もその人の目線次第ではいろんなことが起こっているものだ。例えば、会社でのがんばりが認められたとか、新たな一歩を踏み出したとか。もっと大きなことだったたくさんあったはずだ。どの時代にもいろんなことがあるけれど、それでも、今、この時代に大学生として何かを学んだことに、きっと大きな意味がある。いや、意味を持たせなければならないのだ。大学で学んだ知識が仮に数年で色褪せたとしても、経験を糧にまた成長する必要がある。僕たちの学びはまだ終わっていない、生きる限り勉強はずっと続くだろう。それでも学生としての学びはもうじき終わる。

学生生活を振り返ってみると、大学では今まで以上に多くの人と触れ合った人間として大きく成長したときだったと思う。ほんの少しだけでもスマホや本から目線を上げて生きてみると、実に色んな人がいることがわかった。1人で本を読むだけではわからないことを数多く知った。ゼミでも参加した講義でも境遇の違うたくさんの人を見てきた。生まれも育ちも年齢も違う人々と一緒に考え、学んだ。僕の世界は間違いなく広がった。色んな境遇の人がいて、そのいろんな境遇の人の言動からそのまた先にさらに境遇の違う人の姿が見え隠れするのだ。インターゼミでは特に、周りの人々が優秀で劣等感を感じることもあったし、魔が差してとても愚かな非合理的選択をとったこともあった。苦悶し、破滅するほどに、消えてしまいたいやめてしまいたいと何度思ったことか。何度も何度も悩み苦しめ、熟考の末にやっとの思いで何かを表現して、少しくらは何かを成し遂げられたかもしれない。春、いろいろなことが終わったときにやっと肩の荷が下りたような気がして、少し安堵する。欲張って何かで一番になれない苦しさや、己の未熟さを感じながら。それでもこの悩みと思考こそが、私には意識があって

知能があって人間として生きているんだと実感させるものだった。

私はずっと悩んでいる。そう感じる要因は多分、内言が多いからだと思う。あれやこれやを頭の中でずっと考えて日々、言葉を紡いでいた。考えることは好きだけれどもあまり覚えていないこともある。内言は書き留めたり何度も思い出すことで外言にするのだが、いつも頭にはもやがかかったようだし、いつも何か考え事が頭に浮かんでいてすっきりしない感じも持っている。たいていその考え事とやらはうまくまとまらなくて、うまく人に伝えることはできずにいる。こううまくいかないのもまた人間か、と思ってしまう。

この世の中の誰も知らない何かに気づくこと、そしてそれを表現すること。それが大学という場だと思っている。何か新しいことが言えるだろうか、なにか私にしか思いつかない深い考察はあるだろうか。学んでも学んでも不安は消えない。私は何を学んできたのだろう。何をしてきたのだろうと苛立つ。どんなに考えても答えは出ない。答えのない問いで終わりがなくとも、それでも、悩むものだ。今、卒業論文を書いている。

この春、私は晴れて大学を卒業する。この先にどのような生活が待っているかなんて、誰にもわからない。この先私がどんな選択をするかなぞ、誰も知る由がない。ひとまず私は仕事をする、対価を得る。それだけでなにかになれるだろうか。私が働いてどこかでこの世界の一部を支えるとき、他の誰でもない誰かによってこの世界が支えられているということを思い知るだろう。そしてその連続で世界は成り立っている。

私になにものであるかを見つけるために新たな一歩を踏み出す。人生は道半ば、まだまだ先は長い。



インターゼミでの一枚



仲間と一緒に



仲間と一緒に



農作業体験の様子

こども食堂 ボランティアの思い出

グローバルスタディーズ学部2年代 土金 (ダイシキン)

1年間のこども食堂ボランティア活動は、私にとって意味深い経験でした。きっかけとしては、友達からの誘いでした。当時の私は社会貢献やボランティアに対してあまり関心を持っておらず、単なる興味本位での参加でした。最初はただ友達の提案に従い、こども食堂に足を運んでみました。しかし、その提案が私の大学生活において大きな変化をもたらすことになりました。

私にとって1番の思い出はこども食堂ハロウィンのイベントでした。こども食堂と周囲の店舗で協力し合い、ハロウィンイベントを行いました。ハロウィン当日、街中に様々な仮装した子供たちがいて、子供達は喜びながら元気に街中を駆け回っていましたが、両親は既に疲れ果てている様子でした。子供達は21個のお店を探して、スタンプを集めると最後にスペシャルプレゼントが貰えます。各店舗により貰えるスタンプが違ったり、貰えるお菓子も違います。私もマリオの仮装をして、子供達にお菓子を渡す受付をしていました。子供達がお菓子を貰えて喜んでいる姿が私にとっての喜びでした。当日、足を運んでくださった保護者たちを含んで千人以上の方がこども食堂のハロウィンイベントに参加してくれました。イベントの終わりには私も疲れ果てていました。ハロウィンだけではなく、七夕祭りや花火大会など、こども食堂だけではなく、地域活性化を目的としてのイベントも行いました。普段のボランティア活動でも、こども食堂ハロウィンのイベントと同様に、日々の思い出が心に刻まれました。例えば、日々のこども食堂では、子供達と一緒に食事をする時間が特別な瞬間でした。生活の中で子供達と触れ合うことができる数少ない機会でした。狭い部屋ですが、子供達は学校や日々の出来事について話し合い、笑顔で過ごしています。その中で、子供達が抱えている様々な悩み事や夢などを聞くことができ、それがボランティア活動の醍醐味の一つです。

寒い季節になり、こども食堂の代表から子供達に綿飴を作ってみないと言われ、背中を押してくれ、私は綿飴をチャレンジしてみました。最初は難しかったので何度も失敗しました。しかし、子供達のキラキラして輝いている目に、期待と楽しみが詰まっていました。子供たちは失敗を気にせず、むしろどんどんと新しいアイデアを出してくれました。その度に彼らの無邪気な笑顔と興奮が、私に新たなエネルギーを与えてくれました。最終的には、サッカーボールの大きさの綿飴が作れました。成功した達成感と子供達の溢れる笑顔が私にとってのこども食堂の特別な思い出となりました。

どんなきっかけでも、とりあえず行ってみるという気持ちがとても大事だと思います。新しい経験や挑戦は、自分の可能性を広げ、人生に新たな価値を加えることがあります。未知の場所や活動に足を踏み入れることで、驚きや喜び、成長の機会が待っているかもしれません。こども食堂でのボランティア活動を通じて、社会に対する新しい視点を得ると同時に、自らが何か役立つことができるという喜びを知りました。



平日スタッフさん達との懇談



ハロウィンイベント当日



ハロウィン

